

雙花

花登

筐

一



花
登
筐
上

銭の花 (一)

三八〇円

第一刷発行 昭和四十五年一月十二日

第十三刷発行 昭和四十七年二月十日

著者 花登 筐

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二 郵便番号一二二
電話大代表東京(九四五)一一一一 振替 三九三〇

印刷所 豊国印刷 製本所 中沢製本



© 花登 筐 1970
乱丁本・落丁本はお取り替えます。

目次

加代という女

嫁ぐ日

婚家

新妻

嫁の座

おかみ

228 134 123 85 44 5

題字 裝幀
望月美佐 村山豐夫

銭
の
花

上

加代という女

長い、長い旅だった。

本当を言えば、大阪から、熱海まで、たかだか十時間の汽車である。だが、加代にとってこんなに長く感じた旅はない。

大阪駅を出たのが夜の九時二十分、その日の朝から、姉の和子が、行列して座席をとっておいてくれたので坐ることが出来たけれど、京都を過ぎると、もう身動きは出来なかった。ひとつの座席に三人もの客が坐わり、通路は勿論、座席の間、空間と言う空間は、網棚の上まで人が寝た。それでも、降りる客は、ひとりもなかった。闇屋、復員兵、ブローカー、手洗いへ行けずに、通してくれと半泣きになって叫んでいる娘もいた。

だが、誰も知っちゃいなかった。

ましてや、

〈関口加代 二十一歳 血液型O型〉

と戦争中から習慣の胸に名札をつけたモンペ姿に、無造作に束ねた髪、日に焼けた黒い顔の娘のことなんか、目もくれなかった。

もんぺの下には、少女の頃から習った日本舞踊できたえられたしなやかな、おどろくほどの白い肌がかくされていることも知らなかったろうし、上品だが、平凡な顔立ちの両の眼が、時々ハッと輝くことも、気が付かなかつたろう。

いや、それよりもこの加代が、これからひとりで、嫁に行く旅の途中であることも、膝におかれた風呂敷包みの中には、母のせつがやつと手に入れて、せめてもの花嫁のしるしにと、初夜の床で着る浜ちりめんの純白の肌着が包まれていることも知らなかったろう。

無理もない。加代自身、嫁に行くために、こんな姿で旅をしているとは、自分でも信じられない身なのである。

つい、七、八年前まで、加代が考えていた花嫁は、金屏風の前で、角かくしに文金高島田、かんざしがゆらいで、裾模様の金糸がうちかけの下に重そうにのぞいていた――。

春、秋ともなれば、そんな花嫁が、毎日、加代の家で、披露の宴を挙げに来た。

加代の生家は、大阪の道頓堀の流れに沿った宗右衛門町でも、一、二を争う料亭、南地楼なんちろうであった。

少くとも、ここで披露の宴を挙げる娘は、大阪でも、誰々と分かる家の娘であつたし、加代自身、大してうまいとも思わない料理を食べに、名のある客が競あそつて南地楼の門をくぐり、南の芸妓が、席に呼ばれることに誇りをもったのは、加代の祖母のゆうが一代で築いた格式のせいであつた。

その南地楼の孫娘で、こいさんこいさんと大事にされた加代が、風呂敷包みひとつの花嫁道具で、たったひとりで、伊豆にあるとしか知らない熱川と言うひなびた温泉の村へ嫁に行く。

しかも、婿なる男の顔を見たこともなく、たった一枚の古ぼけた写真と、原田正五なる名前だけをたよりに――。

加代が自分でも、信じられないのは当然のことであつた。

加代が、物心がついたとき、もう宗右衛門町は賑わつていた。

土一升、金一升と言われるこの土地で、三百坪の敷地に、道頓堀の流れを下に見おろせるいくつもの座敷をもち、一夜に何十人と出入りする芸妓は、席がはずむと、客と連れだつて裏口の船乗場から道頓堀の船遊びに出かけて行く。その屋形船も、南地楼のもので、庇の赤い提灯が美しかった。

「こいさん。道頓堀にも、宗右衛門町にも、船もつてるお料理屋はんで、南地楼だけだすで」

加代の守り役の頬の真つ赤な女中は、わがことのように威張つて言つた。

それを聞いたに、加代は、祖母のゆうを偉いと思つた。

加代は、祖母のゆうが、こんな南地楼をひとりでつくつたことを、ゆう自身に聞いて知つていたからである。

「わてがな、この家に嫁いて来た頃はな、小ぢやな小ぢやなふとん屋やつた」

ゆうは、暇を見つけると家人が住む二十坪ばかりの母屋の方へやつて来た。その母屋が一代前のふとん屋のあとであつた。

「それをな、おじいちゃんが死なはつてから、わてひとりでここまでしたんや。料理屋はんで何も知らなかったこのわてがな。それやのに、今のもんはあかんえな」

今のもんとは、どうやら父の一之助や母のせつのことをさしていることは、おぼろげに分かつたが、加代は、それよりもその話を聞くたびに、

「おばあちゃんてえらいのやな」

と心からそう言った。ゆうは、その加代の言葉を聞くと、さも嬉しそうに、加代のお河童頭かっぱあたまを撫ぜながら、

「わてのこと分かってくれるの、お前だけや。ほんまに今のもんちゅうたら、決まりきったことするだけで、下駄はいて道頓堀渡ろうとはせん」

変なたとえを口にするのがゆうのくせだった。

加代はその度たびに、目を丸くする。

「おばあちゃん、下駄はいて歩いて道頓堀渡るの」

「違う違う。人のやらんことやらんとあかんちゅうこっちゃ」

ゆうは、自分の言葉を一言一句聞きのがさない孫の加代が、愛らしくてたまらなくなるらしく、耳もとで、

「誰にも、内緒で、あとでおばあちゃんと活動写真観に行こな」

そう言うのと、又、忙がしそうに、店の方へ行くのが常であった。

だが、そんな後では、決まって、姉の和子が、白い眼で、加代を見た。

「おばあちゃん、あんたばかり可愛がらはるのやな！」

五つ上の和子は、小学校を卒業する頃から南地楼の跡取りとなるために、おかみの道の修業をゆうに命じられ、店の皿洗いから手伝わされて遊ぶひまはなかったのである。

そんなゆうが、死んだのは、加代が、小学校を卒業する年であった。

三日前まで、店へ出て、指図をしていたゆうが倒れたときは、もう心臓が大分弱っていた。元から、心臓には注意しろと言われていたゆうであったが、

「せつにまかしといたら、南地楼は、十日でつぶれる」

平気で、せつの前で口に出して、一切を仕切っていただけに、かなり無理が祟^{たた}つたのである。

加代は、ゆうの枕元に坐わったきりで、心配そうに、ゆうを見つめていた。

せつが、加代を学校へ行かせようとしても首を横に振るだけで、又、ゆうもゆるさなかった。

「わての死に水は、加代にとつてもらうのや」

そう言つて、息子であり加代の父の一之助が、見舞いに顔を出しても、

「お前は、早よ死んでほしいと思てるのやろ」

と憎まれ口を叩いて、白い眼をむけるだけであつた。

一之助は、料理屋の若旦那、道楽の味だけは知つていて、毒にはなつても、薬にはならぬ男であつた。

ゆうの発作が始まると、加代は、

「おばあちゃん、苦しいか」

涙ぐんでは、背中をさすつた。

「わてはもう、ダダ洩^もれのヤカンや。イカケ屋はんも、サジ投げてはる」

医者^{いぎ}の姓が井垣^{いぎ}と言つて、ゆうは、イカケ屋はんと呼んでいたのである。

ゆうは、死ぬ何時間か前、加代の手を握つてこう言つた。

「おばあちゃん、ここへ嫁に来たとき、庭にあんまり木がないので、椿の木植えたら、大家はんにえらい怒られた。大家はんちゆうのは、隣りにあつた柳亭で料理屋でな。庭は、柳ばかりで、庭つづきにそんな木植えられたら、困まるてこうや。おばあちゃんは、ようし、今に自分とこの庭もつて、道頓堀をうちの川にして、椿の花咲かしたるぞで、ふとん屋から料理屋始めて、隣りの柳亭つぶして

地所まで買うたつた。やっぱり道頓堀に椿の花はあわなかったけど、あう花があった。何か知ってるか」

「何の花？」

「銭の花や」

「銭の花」

「そや、人間はな、やっぱりお金もたんとあかん。お金もつてたら、どんな花でも咲くをや。その代わり、怪体けつたいなこととして、お金つくったら、きれいな花は咲かへんで」

子供の加代には、ゆうの言っている意味は分からなかったが、銭の花と言う言葉は、はつきり耳に残った。

ゆうが死んだのはそれから二時間後、息を引き取ってもゆうは加代の手を放そうとはしなかった。

「せつにまかしといたら、南地楼は十日でつぶれる」

ゆうはそう言ったが、南地楼が、急に傾かたむき出したのは、ゆうが死んで三年たってからである。

加代の母であるせつは、料亭のおかみとしての才覚は少なかった。

せつは南地楼の格式にふさわしい曾根崎一と言われる菊乃家なる料亭の娘に生まれた女だが、菊乃家では、娘を料亭の中で育てることはせず、芦屋に家を建て生活と仕事を切り離していたために、素人しらうとの娘と変わりはなかった。そのせつが一を聞くと十五を知ると言う切れもののゆうの氣に入らぬのは当然で、ゆうがまかせ切れなかったのも仕方がなかった。

一之助は一之助で、根が料理屋の若旦那で、男の商売ではなく、帳場に坐わっているだけが仕事だが、出入りの芸妓にチャホヤされる味だけ覚えて、和子や加代が生まれたときには、すでに芸妓を妾に囲い、腹違いの弟や、妹まで出来ていて、その上に、カフエーの女給にまで手を出して、台湾まで

一緒に遊びに行くような道楽者であった。

それでも、せつが、ゆうの残した格式を守っているうちはよかった。

加代が女学校三年生の冬、台所の火の不始末から、火事を出し、強風をうけてアツと言う間に南地楼を焼き、周^まわりの家も、なめつくした。一之助がそれを知ったのは妾の家であった。

火事を出した火元の主人は、はだして、町内を謝罪に廻^{まわ}るのが道頓堀^{かどがわ}界隈^{かいがい}のしきたりである。かけつけた一之助が、そのしきたり通りに、凍^こてつく道を、苦渋^{くじゆう}に満ちた顔で素足で謝罪に歩いて帰ると、焼け跡で、呆然^{ぼうぜん}とまだ立っているせつを見て、

「お前のために、こんな恥かしい目せんならん。このどあほが！」

いきなり平手で、せつの頬をなぐりつけた記憶は、加代の胸にはつきりと今でも残っている。

それでも一之助は、残った土地を抵当に入れ、金を借りると、新しい南地楼を建て、姉の和子に婿を迎えた。

婿は、板前の石島と言う神戸の男で、腕も立ったし如才^{じょさい}もなかった。そこが、遊び人の一之助に気に入られ、入り婿に迎えられ、三代目南地楼の主人の座におさまって、ようやく店を開けたが、急激に、はげしくなってきた戦争を考えていなかったのは、祖母の言っていた、これ又、口ぐせのたとえ通りであった。

「今のもんは、安もんの講釈師や」

安もんの講釈師、少しも先を読まない、先見の明がないと言うことである。

足りなくなりかけた食料事情を、やりくりして、店は、続けたが、高い金は取れなかった。大事な客筋の、船場の織維問屋が、戦争のあおりを食って来たからである。

太平洋戦争に突入して、統制経済に入ってから南地楼は、もういけなかった。

借金の返済が出来ずに、店は抵当に取られ引き渡すことになった。

一之助とせつは、仕方がなく残った道具を売り払い、住吉に、小さな家を借りて越したが、生活は一変した。

かつての南地楼の百分の一の生活も望めなかった。

石島は、軍需工場の賄方^{まかいがた}で働き、せつと和子は、兵隊の防寒服の兎の毛皮づくりの内職を始めた。

加代は、学徒動員で、堺のパラシュート工場へ行っていた。

ただ、一之助は、相変らずぶらぶらして、悪くなった食料事情を、まるでせつのせいのようにあたっていった。

それでも石島が働いているうちは、まだ良かった。

昭和十八年、石島に召集令状が来て、兵隊へ行っていないとなると、生活は、益々苦しくなった。

一之助は、仕方がなく、やっと重い腰を上げて、鉄工場の荷物運びに働きに行ったが、一月もせぬうちに、吐血して死んだ。癌^{がん}が、悪化していたのである。

かつての南地楼の若旦那が、妻と子供二人だけに送られて、野辺^{のべ}の灰となって行く姿を見て、加代は、ゆうの言った銭の花の言葉の意味が、ようやく分かりかけてきた。

葬式でも、銭のある家は、戦争中でも、立派な花が供えられた。灰にする火葬場でも、特等と並等があったし読経も長かった。祖母のゆうはそのことを言ったのではあるまいか――。

南地楼一族を見舞う悲運は、それだけではすまなかった。せつの実家のたった一人の弟が、戦死をして、その悔みにせつが行く途中、爆撃にあって、建物の下敷きになり、両脚の骨を押し潰^{つぶ}されたことである。

昭和二十年、五月のことである。

その後の一家は、悲惨であった。戦争中とて、特別の手当ても出来ず、せつの両脚は、一生立てなくなってしまった。

住吉の家の家賃さえ払えず、せつの弟の未亡人の家に身を寄せて、和子は、母の面倒を見て、加代は、卒業後も、パラシュート工場で働いて、ささやかな給金を得て、毎日、草の葉の汁をすすって生きていた。

終戦になると、加代は、いち早く立ち直った道頓堀の映画館のモギリの仕事の口を見つけて働くことになった。

肩身のせまい思いをして暮らすより、せめて道頓堀の流れのあるどんな小さいところでもとたのむせつの願いを聞いて、加代と和子は、焼野原になった道頓堀沿いの、二つ井戸の誰の土地か分からぬ焼跡に、焼け残りの材木やトタンで、五坪ばかりのバラック小屋をつくって、移った。

加代はうれしかった。

道頓堀を見ていると、祖母のゆうに逢っているような気がしてならなかったからである。

和子の婿の石島が、復員して来たのは終戦の年も明けた正月だった。

板前であったと言うことで、内地の軍隊の賄いをやらされていた石島だけに、一番後の復員とはなつたが、五坪のバラックに、女三人、男一人の生活は酷こだった。

殊ととに夜になると、何とも言えぬ空気が小屋にたちこめた。

一番奥にせつ、加代、和子、石島と寝るのだが、それだけでも少し動く隣りの誰かの手足に触れたし、夜半に、息を殺して抱き合う石島と和子の姿も手にとるように分かって、生娘の加代には地獄のような毎日だった。

それにしてもよく飽きずにつづけられる男女の交わり——ましてや、石島は、結婚後二年にして、和子と別れていた身である。若い男の血が走って毎夜のごとく和子をのぞむのも無理はなかったし、南地楼の看板をかかっている頃ならば、まだ元板前の婿養子と言う遠慮もあったろう。だが、復員してきて、持ち前の要領のよさで、闇市で、関東煮^{かた}きの店を出すに至っては、もう遠慮はなく一層ひどくなった。

元板前は、今や一家の主であった。仕事から帰ると、疲れたと言つては、大の字に横になり、加代をつかまえては、

「足がだるいから、もんでくれんか」

と、ぞんざいな口を叩き、揚句^{あげく}は、両足の不自由なせつにも、

「足は動かんやろけど、手は利^きくやろ」

とマッサージを言いつけるようにさえた。見るに見かねて、和子が文句を言おうものなら、

「いつまでも、南地楼のおかみや娘やと思てたら困まるな。誰が食わしてる」

露骨に言葉にも現われるし、闇市でカストリを引っかけると、帰つて来ては、和子の体を無理にも求めた。

和子が、拒^こばめば拒^こばむほど、執ように声まで出して求めてくる石島に、和子は折れねばならなかった。折れたが最後、和子の方が、我を忘れて声をあげた。

そうした動きを、加代は、耳をおおいたくなるような恥ずかしさや恐怖で、隣りで眠ったふりをし、耐えていねばならなかった。

だが、男を知らぬ加代にも、女の血は流れている。加代の心臓の鼓動のはげしくなるのを、まるで待ちかねたように、その隣りで、石島は、和子を抱く手をとめて、